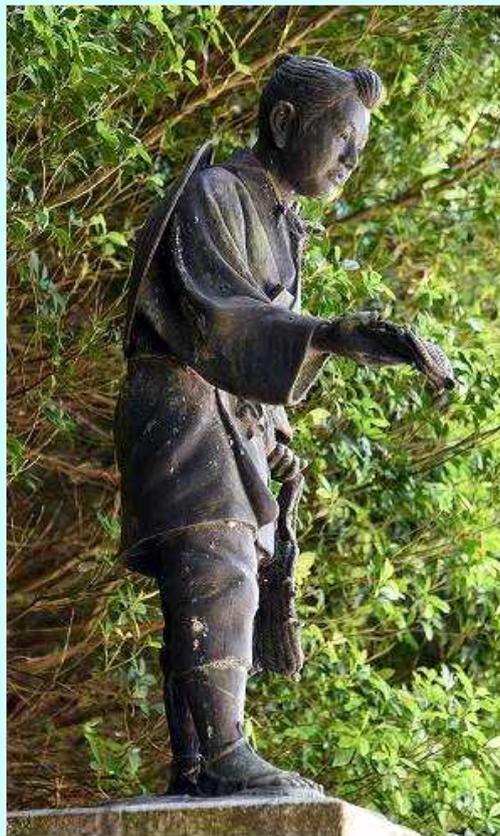


名誉顧問のコモンセンス

怨望論 2

「怨望」をなくすには



草鞋を売る金次郎

さて、成人して家を復興した金次郎ですが、さらに、21歳(文化5年・1808)のとき、母の実家川久保家が貧窮するとこれに資金援助をします。大活躍です。翌年には二宮総本家伊右衛門跡の再興を宣言し、基金を立ち上げました。その頃、小田原藩で千二百石取の家老をしている服部十郎兵衛が金治郎の破格の活躍を見て、思い切って服部家の家政の建て直しを依頼します。金次郎は五年計画で服部家の財務を整理して千両の負債を償却し、余剰金三百両を贈り、自らは一銭の報酬も受け取りませんでした。この評判により小田原藩内で二宮金次郎の名前が知られるようになりました。

このように、尊徳先生の教えは、経済と道德の融和を訴えて、「私利・私欲に走るのではなく、先ず社会に貢献すればその徳はいずれ自らに還元されて、社会も自分も報(むく)われる」と説くものです。これを「**報徳思想**」といいます。それで世間は尊徳を「報徳先生」といいました。

報徳先生は、天明7年（1787）に生まれて安政3年（1856）に亡くなっています。この報徳先生生誕の「1787年」はフランス革命の2年前です。でも、特に関係はありません。

諭吉翁は、天保5年（1835）に生まれて明治34年（1901）に亡くなっています。諭吉の生年の1835年にはアメリカで作家マーク・トゥエンが生まれています。亡くなった1901年には音楽家のヴェルディが亡くなっています。どちらも、特に関係はありません。

尊徳は諭吉よりも50年ほど前の世代の人ですが、尊徳が69歳で亡くなったときに諭吉はもう二十歳でしたから、経世家として既に有名な報徳先生から何らかの思想的影響を受けていたことでしょう。ひょっとすると、諭吉の「怨望」嫌いは報徳先生譲（ゆず）りかもしれません。でも、諭吉の書に報徳先生の業績については一言も触れていません。これも、不思議なことです。

怨望の原因とその解決法

報徳先生が一番心配しているのは、配下の下積みの下級役人たちの心情です。担当の村そのものが疲弊して、村人たちが困窮しているのに、上の役人たちはその責任を下役の役人に押しつけてきます。こういった不満を持つ怨望癖の部下の役人たちの声が報徳先生にも聞こえてきました。

「小碌（しょうろく：安い給料）の臣下（やくにん）、必ず云わん、『大夫以下在職の輩（ともがら：上司たち）は俸碌（ほうろく：給料）我が輩に十倍せり。今は減少すといへども、豈（あに：どうして）、困窮、我が輩の如くならんや。人の上に居り、高碌を受け、他の艱難を察せずして、我が輩たちには『艱苦に安んじ、専ら忠義を励むべし』とは何ぞや。執政（担当の役人）の任たるもの、仁政を行ひ、国の憂患を除き、艱難を救い、衰国をして再び盛んならしむるもの、其の任にあらずや。若し其の任に在て、些事（このこと）を為すこと能はずんば、何ぞ速（すみ）やかに退職せざるや』と云う。是、部下の役人や村人たちの**怨望、止（や）まざる所以（ゆえん：理由）なり**。 【『報徳記』165頁】

そこで、それを聞いた貧村の担当の役人たちが報徳先生に、「その怨望をなくすにはどうしたらよろしいでしょうか」と訊きます。先生は、答えます。また、その答えが恐ろしい……。役人の給料を「全額、断れ」というのです。

「**惟（ただ）、汝の恩碌（給料）を辞せん而已（のみ）**。衰国を再興せんとするに、先づ恩碌を辞し、『聊（いささ）かたりとも用度的一端を補ひ、無碌にして心力を盡さんこと某の本懐なり』と主君に言上し、一藩に告げて以て碌位を辞し、国家の為に萬苦を盡す時は衆臣〔仲間の役人たち〕必ず曰ん、『執政、国の為に肺肝を砕き再復の道を行ひ、恩碌を辞して忠義を励む。然るに我が輩〔ともがら：なかまたち〕、国家に力を盡さずして空しく君碌を受く。豈（あに：意外な感じでどうして）、之を人臣の本意とせん。仮令（たとえ）、令碌の十ヶ一を受るも、〔碌を辞した〕大夫に比すれば、過ぎたるにあらずや』と。 【『報徳記』166頁】

積年の**怨望**（えんぼう：うらみ）氷解し、初めて、〔他の役人たちも〕①素餐（そさん）の罪〔功績も才能もないのに高い位にいて報酬を受けること〕を恥るの心を生じ、②日々活計の道に力を尽くし、③他を怨（うら）みず、④人を咎（とが）めず、⑤如何なる艱苦をも安んじ、⑥之を常とし、⑦之を天命とし、⑧自らの婦女子に至るまで其の不足の念慮（ねんりょ）を去らん。然らば、則ち、①一藩を諭（さと）さずして、②当時の艱難に安んじ、③忠義の一端をも励まんとするの心を生（しょう）ぜん。是、無難の時に當り、大夫たるもの上下の為に一身を責めて人を責めず、大業を行ふの道なり。然して、**惟（ただ）之を行ふ事のあたはざるを憂（うれ**

いとせり。此の道を行はずして人の上に立ち、高祿を受け、弁論を以て人を服せしめんとせば、益々、**怨望 盛にして、国家の殃**(わざわい)**彌々**(いよいよ)**探きに至らん**。何を見て衰国を挙げ上下を安ずることを得んや」と。 【同】

この役人、報徳先生の言うとおりにしました。ここに於て先生、その一家の扶助のため米粟(べいぞく:穀物)を贈り、其の艱苦を補いました。先生は、言ったことに必ず責任をとります。

道元禅師も貧しさを奨励

どうやら、「財産」と「怨望」とは切っても切れない関係にあるようです。「財産」が人間形成において重要な役割を果たすことを、禅においても、道元禅師が「貧しさ」について次のように語っています。

学道の人には第一に必ず貧しくなければならない。財産が多いと必ず(道を求める)志を失ってしまう。在家(一般家庭)において学道する者は、いまだ財宝(財産や宝物)に囲まれてよい住まいを求め、親族にかかわっているので、たとえ道を求める志があっても道の障害となる条件が多くある。昔から一般の者で禅に参する者が多くいるが、その中で勝れているといっても、やはり僧には及ばない。僧は、一枚の衣と一つの食器のほかは財宝を持たず、住まいのことは考えず、衣類や食べ物を貪(むさぼ)らないので、ひたすら学道をする。これは、それぞれみな利益を得るところがあるからである。その理由は貧しいことが道に親しいのである。

ここで、道元は、「衣類や食べ物を貧ることが修行の邪魔になるのだ」と言っているのであって、「怨望」とは関係ありませんでした。

ラクダと針の穴

この「願いを遂げるためには、すべての財産を放棄せよ」との教えは、また、聖書にも出てきます。「ルカ伝」です。有名な「ラクダと針の穴」の譬えが出てくる箇所です。

また、ある役人がイエスに尋ねた、「よき師よ、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。

イエスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。いましめはあなたの知っているとおりで、『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え』」。

すると彼は言った、「それらのことはみな、小さい時から守っております」。

イエスはこれを聞いて言われた、「あなたのする事がまだ一つ残っている。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになる。そして、わたしに従ってきなさい」。

彼はこの言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持であったからである。

イエスは彼の様子を見て言われた、「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。

このお金持ちの財産放棄は、「怨望」とは関係ありませんでした。

取ると施すの仕方

政体批判 また、報徳先生は、別の箇所でも、「怨望が起きるのも、**政体自らが取ると施**(ほど) **すの前後を間違えるからだ**」と論(さと)します。先生、ここで、「取ると施す」という、もう一つの重要な「報徳仕法」を發します。

夫れ国家の政体は多端なるが如しといへども之を要するに **取ると施すとの二つに止まれり**。此の二つを外にして又何事かあらんや。且、「盛衰・安危」も此の二つにあり。「存亡・禍福」も亦然り。然して世上、国の盛衰する所以を察せず、何を以て其の衰廢を挙げんや。何となれば取ることを先んずれば、①国衰え、②民窮し、③怨望起り、④衰弱極る。甚しきは、⑤国家傾覆、⑥亡滅の大患に至れり。施すことを先ずる時は、①国盛んに、②民豊かなり。③人民之に歸し、④上下富饒(ふじょう:農夫や旅人などが携帯する豊かな食糧)にして、⑤百世を経(ふ)るといへども、⑥国家益々平穩なり。聖人の政は仁澤を施す事を以て先務とし、敢えて心を取る事に用いず。暗君は取ることを先として施す事を悪(にく)む。治平・暴乱の由(よ)って起こる所、斯(ここ)にあらざるものなし。
【『報徳記』182頁】

聖人の「仁」ある生活 これは、明らかに報徳先生の現政体批判です。政治批判です。宇津家批判です。この「取ると施す」はまた、報徳仕法の「推譲」(すいじょう)のことであります。入るを測って出るを制する「分度ある生活」をして、節約した分を明日の生活の為にとっておいたり、他人を助けるために「推譲」(ゆずりあたえる)するのです。これこそ、聖人の「仁」ある生活です。

先生は、分度と推譲を説いた「桜町仕法」を宇津家にわたすときに三か村の農民にも次のように言っています —

天道に従って政治が正しく明らかなきときは、①民力は進み、②田畑は開け、③米穀も産出するが、天道にそむいて政治に不正があるときには、①民力は衰え、②国家は亡び、③田畑は荒れ地となる。古語に、「四海困窮すれば天禄永く終わらん」。
【『二宮翁夜話』】

この「四海困窮すれば天禄永く終わらん」は、堯帝が天子の位を舜帝に禅(ゆず)たときの言葉で、「四海」はこの世の中、「天禄」とは天からの恵みのことです。「まことに過不及なき中庸の道を執って政を行え。もし四海(世の中)を困窮させることがあれば、天の恵みは永久に断続するであろう」と諫めたのです。報徳先生は、宇津家にクギを刺したのです。

中国の堯と舜を巡る逸話やこの「四海困窮すれば」などと言った難しい言葉を、当時の藩士やその子弟たちは、よく知っていたに違いありません。金次郎は、自ら勉強したので覚えていたのです。

それで時には、報徳先生も、この難しい言葉について周りの者たちに自らその意味を説いて聞かせました。【『二宮翁夜話』四十話40頁】

先ず、「推譲」の説明をします。

翁はこう言われた — 「入るのは出たものが帰るのだ。来るのは押し譲ったものが入りくるのだ。たとえば、農夫が田畑のために力を尽し、人糞(肥やし)をかけ干鰯(ほしか)を用

い、作物のために力を尽せば、秋になって実りを得ることが必ず多いにちがいない。ところが、菜をまいて芽が出ればすぐに芽をつみ、枝が出れば枝を切り、穂を出せば穂をつみ、実がなれば実を取る。こうしては決して収穫がない。商法もまた同じことで、自分の利欲のみを考えて買う人のためを思わず、むりやりにむさぼれば、その店の衰えることは眼に見えている」。

そして話は、「四海困窮」に移ります —

「古語（『書経』大南謹）に『人心これ危し。道心これ微かなり。これ精、これ一。まことにその中を執れ。四海困窮せば、天禄永く終わらん』とある。これは舜より禹へ天下を譲るときに心がまえを説いたものである。上の者は下から取り立てることが多く、下が困窮すれば上の天禄も永久に終りとなる。終わるのではなく、天より賜わったものを天に取り上げられるのだ。その原理はまた明白で、まことに金言である。中国の話だと思ってうかつに聞かず、よく肝に銘じておけよ」。

「『人心これ危し。道心これ微かなり』というのは、身勝手にすることは危いものだぞ、他のためにすることはいやになるものだぞということだ。『これ精、これ一。まことにその中を執（と）れ』とは、よく精力を尽し、一心堅固に、二百石の者は百石で暮らし、百石の者は五十石で暮らし、その半分を「推譲」して、一村の衰えないように、一村のますます富み、ますます栄えるように努力せよ、ということだ。『四海困窮せば、天禄永く終わらん』とは、一村困窮するときは、田畑を何ほど持っていて、決して作徳は取れないようになるものだぞということであると心得るがよい。帝王の話だからこそ四海といい。天禄というので、おまえたちのためには、四海を一村と読み、天禄は作徳と読め。よくよくこれを肝に銘じなさい」。

名演説家 こういう話を報徳先生は、折ある毎に農民たちに聞かせていたのでしょう。すべて、自分が学んだことを話しているのです。これこそ、論吉翁がいう「学問の要は活用に在るのみ。活用なき学問は無学に等しい」ことです。報徳先生は、農民たちが迷ったり困ったりしているのを黙って見ていることができないのです。これこそ、孟子がいう「みな怵惕惻隱（じゅってきそくいん）の心こころ有り」で、思わず教えてしまうのです。老いた報徳先生の元には、話が聞きたくて一日に百三十人もの面会者が集まりました。報徳先生は、論吉翁がいう「スピーチ」をして広く智見を散しました。

論吉：「富貴は怨の府に非（あら）ず」

報徳先生はまた、「世間の怨望は貧からくる」といっています。ところが、一方、後の世の論吉は、「富貴は怨（うらみ）の府（中心）に非（あら）ず、貧賤は不平の源に非ざるなり」と断言しています。まったく、報徳先生と論吉翁では、「怨望」に対する見解が違うのです。

今その（怨望の）源因（原因）を尋ぬるに、ただ窮（きゅう：行き詰まり）の一事に在り。但しその窮とは困窮・貧窮等の窮に非ず、人の言路を塞（ふさ）ぎ人の業作を妨ぐる等の如く、**人類・天然の働きを窮せしむる** ことなり。貧窮・困窮をもって怨望の源とせば、天下の貧民は悉皆（しっかい：すべて）不平を訴え、富貴は恰（あたか）も怨の府にして、人間の交際は一日も保つべからざる筈（はず）なれども、事実において決して然らず、如何に貧賤なる者にてても、その貧にして賤（いや）しき所以の源因を知り、その源因の己が身より生じたることを了解すれば、決して妄（みだり）に他人を怨望するものに非ず。その証拠は故（こと）さらに揭示するに及ばず、今日世界中に貧富・貴賤の差ありて、よく人間の交際を保つを見て、明らかにこれを知るべし。故に云く、**富貴は怨の府に非ず、貧賤は不平の源に非ざるなり。**

【『学問のすゝめ』 117頁】

このように諭吉翁は、「真の困った怨望とは、人の言路を塞ぎ人の業作を妨ぐことだ」といいます。ここでいう「人」とは、文明開化時の近代的日本人のことです。これからの新しい開けた日本を作っていく国際人としての国民です。その意志と行いを邪魔をする人たちのことなのです。その「怨望を持った人たちは」、一体、だれの、何を、羨ましいと嫉妬しているのでしょうか？ 一方、報徳先生は、「怨望」を、農民と下級役人の側から、施政者を見た経済的な階級差に原因ありとします。正統な労働の価値を評価しない暗愚政治のなせる業だと言うのです。この報徳先生と諭吉翁との見解の違いはどこにあるかと言えば、「時代の違い」と「主旨(テーマ)の違い」にあります。

怨望は焼き餅 一方、諭吉翁は、「怨望は、疑猜・嫉妬・恐怖・卑怯の類で、その原因は、「己が身より生じたる個人的な劣等感だ」といいます。そして、孔子の言葉「女子と小人は近づけがたし」をとりあげて、その時代に、社会的に弱い立場の女性と子供を束縛して自由を与えなかった社会的な差別が原因であるとします。諭吉は、「そもそも孔子の時代は、明治を去ること二千有余年、野蛮草見(文化が遅れ世の秩序が乱れていること)の世の中なれば、教えの趣意もその時代の風俗人情に従い、天下の人心を維持せんがためには、知ってさらに束縛するの権道(ごんどう:手段は正しくないが、目的は正しい道にかなうこと。目的をとげるために執る便宜の不正な手段。臨機応変の手段)をなかるべからず」といいます。このように「怨望」を、幼稚な者たちの単なる焼き餅と捉え、その生じる原因を自由のない差別の時代の「方便＝権道」のせいにしてしています。

人間の交際 この「怨望」の問題について、諭吉翁が、このように「人間の交際に害あるものは怨望より大なるはなし」で大上段に振りかぶって論じ始めたわりには、女史と小人を対象にしたり、限定された場所の大奥で生きる御殿女中の喜怒哀楽を例に挙げて、「個人の識見の問題だ」として終えたのは期待外れでした。でも、わざわざ御殿女中を「怨望」の主人公にしたのは、そのあとで、こういった無識無学の御殿女中と無智無徳のお殿さまの世界とは反対に、開かれた世界である「民権議院」と「出版の自由」こそが、怨望に易(かわ)るに活動をもってし、嫉妬の念を断ちて相競うの勇気を励ますものであることを言いたかったのです。従って、諭吉翁は、世の中、「自由に言わしめ、自由に働かしめ、富貴も貧賤もただ本人の自ら取るに任(まか)して、他よりこれ[怨望]を妨ぐべからざるなり」と結論づけたのです。これは、「怨望」を悪者にして、「文明は人間の交際から起きる」という、『文明論之概略』と『学問のすゝめ』の双方で主張したかった持論ですから、これはこれでいいのです。

報徳先生も「怨望」を悪む

一方、「怨望」を広く社会的な問題として捉(とら)え、「なんの方策もなく、貧困農村の救済手段を過った統治者側の失敗が、怨望を生じさせる原因だ」と強く論じたのが報徳先生です。経世家の先生には、農村に蔓延する怨望を封じる大きな責任とそれを可能にする絶対的な手法があるのです。

報徳先生 貧村の再興にかかる

報徳先生は、「怨望」の本当の原因は、農夫たちの心と生活と働きの貧しさそのものから生じるものだと知って、農村において、「精神の作興」と「農業経営」と「労働の分配」を施しました。これを、「報徳示方」といいます。藩から、小田原藩内の廃村寸前の農村の復興を任された先生は、まず、農民たちの勤農精神の鍛錬から始めました。村が貧しいのは、農民自身が怠惰で働かないことにあります。

先生が復興を担当した貧村の桜町へは、これまでに、村の窮乏を立て直すために担当役人が四人も五人も派遣されたのですが、「手を下す所なく、或いは、奸民の為に陥(おとしい)られ、又は、衆民に逐(お)われ、数月も此の地に留まること能わず。土地の衰廃・人気の汚悪・民家の貧窮、實に極まれり」というありさまでした。先生は、毅然としてこの如き難地に臨みました。

精神の作興 先生、櫻町陣屋[官舎]にあり。櫻町陣屋は小田原領分の時の陣屋なり。この陣屋の①屋椽破れ、②桂腐朽し、③四壁皆くづれ、④軒下より草木生ひ繁り、⑤狐狸・猪鹿(こりちよろく)此に居る。邑中(ゆうちゅう:村中)も之に準じ、⑥田圃(でんぼ)三分が二は茫々(ぼうぼう)たる荒野となり、⑦僅かに民家近傍而己(のみ)。耕田存すと雖(いえど)も、⑧毎戸惰農(だのう)にして、⑨百草其の上に蔓(はびこ)り、⑩諸作は其の下に伏せり。⑪衰廃窮まり、⑫家々極貧にして、⑬衣食足らず、⑭身に弊衣(へい:破れた衣服)を纏(まと)ひ、⑮口に糟糠(そうこう:粗末な食べ物)を食らひ、⑯耕耘(こうてん)の力なく、⑰徒(いたずら)に小利を争い、⑱公事・訴訟止まるときなく、⑲男女酒を貪(むさぼ)り、⑳博奕(ばくぎ)に流れ、㉑私欲の外他念あることなく、㉒人の善事を惡み、㉓人の惡事・㉔災難を喜び、㉕他を苦しめ、㉖己を利せんことを計り、㉗里正(りせい:担当の役人)は役威を借り、㉘細民を虐(いた)げ、㉙細民は之を憤(おこ)り、㉚互に仇讐の思ひをなし、稍(やや)、損益を争ふに至りては、㉛忽ち相鬪ふに至れり。㉜土地の衰廃、㉝人気の汚悪、㉞民家の貧窮、實に極れりと謂べし。【『報徳記』33頁】

よくここまで悪く言えたものです。①②③……と番号を振って数えると、33ヶ条もありました。此中には、むろん、「怨望」(㉑㉒㉓)もあります。これを糾弾する先生の口調は、歌舞伎の助六の悪態(あくたい)よりもずっと凄いです。先生は、実際にそう思ったのでしょう。これが、この時代の農村の醜い現実の姿だったのですから。

貧村復興の「報徳示方」

責任感が強く、自信もある報徳先生は、早速、自らの「示方」(やり方)で荒廃した村の再興に努めます。そのやり方と身の処し方はすさまじいものでした。よく一人で、ここまで出来たものです。次の文章も、読みごたえのあるものです。よくお読みください。こう言った具体的な行為が書かれているのも、村の顔役や主導的な立場の農民たちへの「報徳仕法」(報徳先生の村起こしのやり方)の紹介でもあります。

「農業経営」と「労働の分配」 先生、断然として比の如き難地に臨み、先ず、①[一般の農家の]民屋に住して、②[役人が住む]陣屋の草菜(そうらい:雑草)を除き、大破を補理して之に移住し、③三邑(さんゆう:桜町の三つの村)旧復の規格を立て、④鷄鳴より初夜に至るまで、日々廻り歩き、⑤一戸毎に臨んで人民の艱難・善悪を察し、⑥農事の勤情を弁じ、⑦田圃の経界を察し、⑧荒蕪(こうぶ:荒れた土地)の広狭(こうきょう:広い狭い)を計り、⑨土地の肥・⑩流水の便利を考へ、⑪大雨・暴雨・暴風・炎暑・嚴寒といへども一日も廻歩を止めず、⑫善人を質し、⑬悪人を諭(さと)して之を善に導き、⑭貧窮を撫育(ぶいく)し、⑮用水を掘り、⑯冷水を抜き、⑰勸農の道を教え、⑱荒蕪(こうぶ:荒れた田や畑)を開き、⑲諸民安堵の良法を行ふ。⑳自ら艱苦に処し、㉑衣は綿衣身を掩ふに足るを期し、㉒用うべからざるに至らざれば別衣を製せず、㉓食は一汁の外を食せず、㉔邑中に出て食するに冷飯に水を濯ぎ、味噌を嘗めて食するのみ。㉕邑民の薦食(薦める食べ物)一物も食せず。日く、「汝等惰農の為に比の如く困窮に及べり。予(われ)、千辛萬苦を盡し、

汝等を安んじ、㉔汝等の衣食足る時に至らざれば、予も又、衣食を安んぜず」と。終日、㉕聊(いさき)かも休まづ、㉖夜に至り陣屋に帰り寝ること僅かに二時(ふたとき)に過ぎずして起き、㉗前日に明日の為すべき事を考へ、㉘萬事の処置少も遅留することなく、流水の卑(ひき)に下(くだ)るが如し。其の神速なること衆皆常に驚歎せり。

【『報徳記』34頁】

なぜ、先生はこんなにも我武者羅(がむしゃら)に働いたのでしょうか？ その理由は、先生と小田原侯との間にとり交わされた「日本橋・巢鴨問答」と「温泉問答」によって語られます。小田原侯から、「桜町の復興は可能か？」と訊かれて、先生は答えます —

土地瘠薄にして仁政あり 某(それがし)、止む事を得ず彼の地に到り土地と民情とを察し再復の事を考えるに、土地瘠薄(せきはく)にして人民の無頼・怠惰も亦極る。然りと雖も之を振起するに仁術を以てし、邑民・旧染(きゅうぜん:古くからしみこんでいる悪い習慣)の汚俗を革(あらた)め、専ら力を農事に盡す時は再興の道なきにあらず。而して仁政・行われざる時は、仮令(たとえ)、年々四千石の貢税を免(ゆる)すといへども彼の貧困は見ることあるべからず。譬(たと)えば都下に於て巢鴨の地と日本橋の地の如し。日本橋の土地は屋賃如何程貴しといへども売買の利・厚きが故に人競ひて居住し富優を得る。巢鴨の如きに至りては、金銀融通・売利薄きが故に屋賃なしといへども人、之を望まず。又、貧窮を免れず。土地は貢税多しと雖も、民・其の益多きが故に繁栄し、下国は貢税なしといへども **田産薄きが故に其の艱難を免れ難し**。是、土地の厚薄の致す所なり。然して **比の如き下国をして上国と共に栄えしめんと欲せば、必ず仁政にあらざれば能はず**。 【『報徳記』27頁】

風呂を炊き続ける 如何となれば、温泉は人力を得ずして周年温かなり。風呂は入力(いり)を以て炊くが故に暖か也。暫時も火を去る時は忽然として冷水となる。上国は温泉の如く、下国は風呂に似たり。故に **仁術を行ふ時は栄え、仁政なき時は衰ふ**。今、野州櫻町の衰撥を救ひ永く民を安ずるの道は他無し。①厚く仁を施し、②其の難苦を去て、③安栄に導き、④大に恩沢を布きて、⑤其の無頼の人情を改め、⑥専ら土地の貴き所以を教へ、⑦力を田圃に盡さしむるにあり。然して此の興復の用度幾千萬金なるや予め其の数を定め難し。前々、君、彼の土地再復を命ずるに、許多の財を下し玉ふ。是を以て其の事成らず。以後、之を興復せん(おこせむ)に必ず一金も下し玉ふことなかれ」と。 【『報徳記』28頁】

生命を養うもの 先生は、まず、原因も効果も分からずにお金を出す君主の失政を非難します。そして次に先生は、農民たちにも責任があるといいます。自らの失態を、「田の水が少ない」という環境の悪さのせいにして、それを自ら工夫して改めようとしなないのはなぜだ — と叱咤激励します。

「汝の邑(ゆう:村)、衰廢極るもの独り田水を失ひ農事を勤(つとむ)ること能はざるのみに非ず。何ぞ用水なくんば従前の田を畑と為し、多く雑穀を得て活計をなさざるや。豈(あに:どうして)、人命を養うもの独(ひとり)り稻梁(とうりょう:穀物の総称)耳(のみ)ならん。百穀、皆、生命を養うもの也。而(しか)して、①田水乏しきを口実となし、②良田を蕪没(ぶぼつ;台なし)に歸して顧みず、③博奕(ばくえき:博打)を事とし他の財を借り、④一時の窮を補わんとす。是れ、⑤家々絶窮、⑥遂に離散する所以(ゆえん)にあらずや」。

「抑々(そもそも)、博奕なるもの富家(ふか)と雖(いえど)も、祖先伝来の家・株を傾覆するに至る。況や貧人にして此の悪業を為す、其の亡滅、迅速ならざるを得ず。且(かつ)、田水なきを以て良田を荒し、衣食なきを憂ふ。夫(それ)、田圃は衣食の本也。其の根本を棄てて以て他に求む。尚(なお)、井を塞ぎて水を求めるが如し。何れの時か之を得んや。

「農力勸み、糞培(ふんばい:肥やし)怠らざる時は、国の有益たる田に勝されり。何ぞや。

田(水田:すいでん)は[年に一度の]一作に止り、圃(ほ:畑)は[年に二度の]両毛作なればなり。汝等、農を持って業とす。素より畑の有益を知らざるには非ず。知って而して耕耘(こうん:耕す)せざるは他無し、其の労苦を厭い、怠惰を旨とし、努せずして米財を貪(むさぼ)らんとするが為め也」。

我が方法は、①節儉以て、②冗費を省き、③有給を生じ、④他の艱苦を救い、⑤各其の業を勉励、⑥刻苦・⑦終身・⑧善行を履み、⑨悪業を為さず、⑩勤動以て、⑪一家を全するにあり。

「戸々、此の如くならば貧村必ず富ますべく、廢妄の邑里(ゆうり・村)と雖も必ず興復再盛に至るなり」。

名文家高慶 凄い迫力です。こう、一気呵成に、弁々と論じられては、ただ呆れて、口をポカンと開けて聞いているより他ありません。特に報徳先生は偉丈夫です。その長身六尺(1m82cm)と二十五貫(94kg)の大きな身体で、頭の上から朗々たる大声でまくし立てられては恐れ入るより仕方ありません。「先生の其の声、恰(あたか)も雷の如し。威風凜凜(りんぜん:りいさいま)として其の面(おもて)を仰ぎ見る者なし。流汗衣を沾(うるお)すを覺えず」というありさまです。

この「記述」を読むと、まさに先生が目の前に突っ立て怒り散らしている姿が目には浮かびます。ただしこの文章は、報徳先生に終始傳(かしず)いていた高弟の富田高慶が記したものです。高慶は相馬藩士で、先生の名声を聞いて入門しました。後に、報徳先生の妹文子の夫となる人です。入門したときは、報徳先生が五十三歳、高慶は二十六歳でした。入門前の先生の業績や具体的なやりとりは伝聞によるものです。高慶は、血縁関係があるので、いつも先生のそばにいて、いろいろな人との対談や会合や講話に接することが可能なので、それを聞き書き出来る恵まれた立場にあります。ただ、この『報徳記』は報徳先生の自筆ではないので、先生の語った言葉そのままでないのは残念です。ここが福沢諭吉が自分で書いた『学問のすゝめ』や『文明論之概略』の文章と全く違うものなので厳密には真偽の保証はありません。あとでご当人の報徳先生の検閲は受けたものと思われます。なかなかの名文で、且つ、絶好調の語り口や説得力のある話しぶりで表現されているので由(よし)としましょう。

文体は古文 高慶がこの『報徳記』を書くについて、文体をどれにしようかと決めかねている事情が述べられている文章が高慶の「まえがき」にあります。誰が読むかといえば、主に、藩のお役人たちです。それに村の有力者たちです。報徳先生と高慶は、その人たちに読ませたかったのです。

或日、先生、畢世(ひっせい:終生)の論説・事業を記するに漢文を以てす可べしと。或る人曰わく「漢文なる者は簡古を以て是と為す。今細大の事業を筆するに至ては、[漢文が得意な]能文者に非(あら)ざるよりは、詳覈(しょうかく:詳しく調べる)ならざる所なきを得ず。故に通俗文字を以て記するに如かざる也」と。今後説に随ふ。

ここでいう「通俗文字(和文)」とは、いわゆる今で言う「古文」のことです。通達文や手紙や日記などは、この古文でかかれました。一般にはそれが分かり易くて良かったのです。むろん、いまの私たちにとってはこれでも難解過ぎます。でも、なかなか格調高い名文です。筆者の高慶は相馬藩士で教養もあり、特に優れた文学者であったことでしょう。

それに、また、難しい漢語が沢山出てきます。特に、先生が担当した農村改革に必要な、

手法や農作や田畑に関する専門用語も数多く出てきます。「恵恤」(けいじゅつ:めぐみあわれむ)・「恤民」(じゅつみん:民をあわれみめぐむこと)・「溝洫」(こうえき・こうきょく:「洫」は田の水路の意。みぞ。どぶ。田と田との間のみぞ)・「孳々」(じじ:努力し励むさま)・「黽勉」(びんべん:務めを励むこと)・「莠」(はくさ:水田に生える雑草)・「礫薄」(こうはく:地味のやせていること・そのさまやその土地)・「蕪」(ぶらい:雑草が茂って荒地)などなどです。

それに、「豈」(あに)・「耳」(のみ)・「而」(しかして)・「所以」(ゆえん)・「何ぞ」(なんぞ)・「抑々」(そもそも)・「且」(かつ)・「聊」(いささか)・「稍」(やや)・「竊に」(ひそかに)などなど、接続詞を中心として読み慣れない言葉ばかりです。それに、語調を整える為に四文字熟語が多用されています。これも、論吉翁の書物と同じです。人々に聞かせるために音読しても読みやすく、理解し、覚えやすいのです。読んだ人たちに、聞いている人たちに、文章をそのまま、覚えて欲しかったのです。和歌や俳諧が、五七五七七や五七五と定型になっているのも、覚えやすく、思い出やすく、真似しやすくなっているからです。

この富田高慶の文章も快調で、その武張った物言いが、返って報徳先生の厳(いか)めしい口調が能くでていて、演者の張り扇(おおぎ)がないだけで、まるで講談を聞くようです。これも由としましょう。慣れてくるとこの名調子に快感を覚えます。論吉翁の書物同様、この時代の漢語や漢文調の古文に慣れるのにはいいお手本です。その教育的効用にも感謝しましょう。

でも、これらの漢字を良く理解出来たのですから、当時の官僚はある程度の学問は修得していたのでしょう。農民であった二宮金次郎も、『四書五経』を読みました。「四書」は儒教の経典で『大学』『中庸』『論語』『孟子』をいい、「五経」は『詩経』『書経』『周易』『春秋』『礼記』です。どれも、江戸時代、必ず藩士たちは藩校で学んだものです。当時の幕臣の子息たち必読の教科書でした。

饒舌な論吉翁の文章

秀才で勉強家の論吉翁の文章は、極めて饒舌一方で、おしゃべりが過ぎます。

まず、「強大な政府が力で以て小民を制圧するのは間違いだ」と論じるときに、「身体と心は一体であって、個人のものであり、政府のものではない」と主張して、その譬えを11ヶ条も並べて見せます。逆説的で、すこぶる饒舌です。

身体と心は別つ [例えば] 人の身と心とは全くその居処を別にして、①その身はあたかも他人の魂を止むる旅宿の如し。②下戸の身に上戸の魂を入れ、③子供の身に老人の魂を止め、④盗賊の魂は孔夫子の身を借用し、⑤獵師の魂は釈迦の身に旅宿し、⑥下戸が酒を酌んで愉快を尽せば、⑦上戸は砂糖湯を飲んで満足を唱え、⑧老人が樹に攀(よじ)りて戯るれば、⑨子供は杖をついて人の世話をやき、⑩孔夫子が門人を率いて賊をなせば、⑪釈迦如来は鉄砲を携えて殺生に行くならん。奇なり、妙なり、また不可思議なり。これを天理人情と言わんか、これを文明開化と言わんか。三歳の童子にてもその返答は容易なるべし。【『学問のすゝめ』76頁】

また、政府が人民を扱うのに、「親子のようにしてはいけない」と諭すときには次のように18もの悪例を列挙して論じます。饒舌です。

父母と子供 かく人民を子供の如く牛羊の如く取扱うと雖(いえど)も、前段にも言える通り、その初の本意は必ずしも悪念に非ず、かの実の父母が実の子供を養うが如き趣向にて、第一番に①国君を聖明なるものと定め、②賢良方正の士を挙げてこれを輔け、③一片

の私心なく、④半点の我欲なく、⑤清きこと水の如く、⑥直きこと矢の如く、⑦己が心を推して人に及ぼし、⑧民を撫するに情愛を主とし、⑨飢餓には米を給し、⑩火事には銭を与え、⑪扶助救育して、⑫衣食住の安樂を得せしめ、⑬上の徳化は南風の薫するが如く、⑭民のこれに従うは草の靡くが如く、⑮その柔らかなるは綿の如く、⑯その無心なるは木石の如く、⑰上下合体共に太平を謡わんとするの目論見ならん。⑱実に極樂の有様を摸写したるが如し。されどもよく事実を考うれば、政府と人民とはもと骨肉の縁あるに非ず、実に他人の附合なり。他人と他人との附合には情実を用ゆべからず、必ず規則約束なる者を作り、互いにこれを守って厘毛の差を争い、双方共に却って円く治まるものにて、これ乃ち国法の起りし由縁なり。【『学問のすゝめ』100頁】

このように、諭吉翁は極めて饒舌です。必要以上におしゃべりなのは、大学の教室で、偉い先生が教壇の上から勤勉な学生たちに向かって高尚な理念を説いて聞かせるのではなく、ここでの話す相手が(ここでは読者なのですが)一般の市民なので、お茶でも呑みながら隣に座って世間話をするように、極めて親しく、分かり易く、「文明開化」を話して聞かせているからです。勢い、調子に乗って、独り、談論風発・高談雄弁・強談威迫なすすべもなく、説いては来たり説いては去る有様です。翁の得意満面の姿が目には浮かびます。この饒舌こそが、いま、この場で、日本国とその国民に対して諭吉翁がしなければならない使命なのですから。

金次郎の勉学の秘密

さて、こちらも饒舌な報徳先生です。でも、不思議なのは、環境的に学問に恵まれた諭吉翁と違って、どうして貧農民に過ぎなかった金次郎がこのような難しい本が読め、また理解でき、また読んで学んだことを実際に実行できたのでしょうか。また、当時、貴重であったそのような本をだれが貸してくれたのでしょうか。

次のような話が、福住正兄の『二宮翁夜話』に載っています。金次郎が二十六歳のとき、小由原藩の家老の服部十郎兵衛の若党になったときのお話です。

「小田原に至る。藩の閥家の服部氏に三男あり、皆能く書を読む、翁之を見て心ひそかに之を喜び請ふて家僕となる。夜はすなはち其の読書の傍に侍し、之を聴いて倦(う)まず、遂に四書に通じ、能く之を暗記し、又請ふて二子往学の僕となる。至れば即ち講堂の下に立ち、ひそかに講義を聴き、略(はぼ)文義に通ず」

この「立ち聞き法」が、金次郎の唯一の勉強方法でした。

新井白石も、儒学の本を単独で学んだことを自伝『折りたく柴の記』で、次のように書いています。

十七歳になったとき、私と同様に出仕していた若侍の家に行き、机の上においてある本を見ると、『翁問答』(中江藤樹著)という表題であった。どんなことが書いてあるかと思ったが、借りられたので、家に持って帰って読んでみて、はじめて聖人の道というものがあることを知ったのである。以来、儒学に切実な志をもったけれども、師匠とすべき人もなかった。京都の医者で、少し学才のある人が、土屋の殿のところへ毎日来ていた。この人に学問の志のことを話すと、『小学』の題辞を講釈して聞かせてくれた。そののちまた程伊川(ていいせん)の『四箴』(しん)を講義して聞かせてくれたので、やがて『小学』の本を日夜暗誦し、それが終わると四書を暗誦し、その後また五経をも暗誦したが、これらはみな、読み方を教えてくれた師匠があったわけではない。自分で『韻会』『字彙』などの本で習い覚えたのだから、あとで考えるとまちがったことばかり多かった。

【『折りたく柴の記』桑原武夫訳中公クラシックス版42頁】

ここでも、白石であっても、独学なので間違っただけが多かったようです。農民であった報徳先生ならなおさらのことです。よく頑張りました。でも、金次郎にとっては、これは一概に間違いとはいえません。本来の正規な解釈とは違っていても、報徳先生の解釈がそれなりに理にかなってれば、それは「新説」です。「新しい解釈」です。間違いとは言えません。日本人が中国の古典を読んだので、これまでになかった新しい解釈であり、その時の現実に合って実効性が高く、効果が偉大なものであれば、それが「正しい解釈」なのです。

常の道と常の川

次の老子の言葉についての報徳先生の説は、なかなか良い解釈で、いかにも「日本的な老子」です。漢籍を読んだ日本人がそう感じて、とても間違いとはいえません。

老子が「道の道とすべきは常の道にあらず」と言ったのは、「川の川とすべきは常の川にあらず」というのと同じだ。堤を築き堰を張り、水門を立てて引いた川は人作の川で自然の常の川ではないから、大雨のときには、みな破れる川である。天然・自然の理を言ったのだ。理は理であるが、人道とは大いに異なる。人道は、「この川は堤を築き堰を張って引いた川だから、年々歳々、普請・手入れをして、大洪水があっても破損のないようにと力を尽し、もし流失したときは、すみやかに再興して元のごとく早く修理せよ」というのを人道とする。もと築いた堤だから崩れるはずであり、開いた国だから荒れるはずというのは、言わずと知れたことだ。老子は自然を道とするから、それを悪いというわけではないが、人道には大害がある。つまりは、老子の道は、「人は生まれたものだから死ぬのは当たり前なことだ。それを欺くのは愚かなことだ」というようなものだ。人道はそれと違い、他人の死を聞いても、「さて気の毒なこと」と嘆くのを道とする。まして親子・兄弟・親戚ではなおさらだ。これらの理由をもって推察すべきである。【『二宮翁夜話』54頁】

農民は、「人が死ぬのは当たり前だ」と天の道を守り、大雨で壊れた水門を、「これが常の川だ」として何にもしないで捨てておくのではなく、「さて気の毒なこと」と思って手を加え、修理に掛かるのが真の人道だということです。少し難しいのですが、これも素晴らしい「報徳流老子解釈」です。これもまた、諭吉翁が『学問のすゝめ』でいう本当の「実学」です。

でもなぜ、報徳先生は、そこまで「儒学」にこだわって頑張ったのかまだよくわかりません。例えば、先生は実際に、破壊された農村を復興させなければならぬ強い使命があるので、あらゆる所にその仕法を求めていたからだろうと思われれます。白石も文章を丸暗記したので、報徳先生も丸暗記したのでしょう。それで、この老子の言葉の解釈のように、人にもものを説くときにもすらすらと「四書五経」の文言や自分の考えが出てきたのです。これでは、不勉強なお役人たちから嫌がられ、「怨望」されるはずで

報徳先生の勝手な古典解釈の一例を見てみましょう。

天禄永終の説

翁はこう言われた — 「入るのは出たものが帰るのだ。来るのは押し譲ったものが入りくるのだ。たとえば、農夫が田畑のために力を尽し、人糞をかけ干鰯を用い、作物のために力を尽せば、秋になって実りを得ることが必ず多いにちがいない。ところが、菜をま

いて芽が出ればすぐに芽をつみ、枝が出れば枝を切り、穂を出せば穂をつみ、実がなれば実を取る。こうしては決して収穫がない。商法もまた同じことで、自分の利欲のみを考えて、買う人のためを思わず、むりやりにむさぼれば、その店の衰えることは眼に見えている。古語(『書経』大南謀)に、「人心これ危し。道心これ徴かなり。これ精、これ一。まことにその中を執れ。四海困窮せば、天禄永く終わらん」とある。これは舜より南へ天下を譲るときの心がまえである。上の者は下から取り立てることが多く、下が困窮すれば上の天禄も永久に終りとなる。終わるのではなく、天より賜わったものを、天に取り上げられるのだ。その原理はまた明白で、まことに金言である。

「しかし儒者のように講じては、今日のことには何の用にも立たないから、いまおまえたちのために分かりやすく読んできかせよう。中国の話だと思っとうかつに聞かず、よく肝に銘じておけよ。『人心これ危し。道心これ徴かなり』というのは、身勝手にすることは危いものだぞ、他のためにすることはいやになるものだぞということだ。『これ精、これ一。まことにその中を執れ』とは、よく精力を尽し、一心堅固に、二百石の者は百石で暮らし、百石の者は五十石で暮らし、その半分を推譲して、一村の衰えないように、一村のますます富み、ますます栄えるように努力せよ、ということだ。

ここでは、報徳先生も必死です。なんとか、一人でも多くの農民を勤労に就かせたいのです。幸い、農民のだれひとりとして老子を知りません。報徳先生の独壇場(どくせんじょう)です。

「『四海困窮せば、天禄永く終わらん』とは、一村困窮するときは、田畑を何ほど持っていても決して作徳は取れないようになるものだぞということであると心得るがよい。帝王の話だからこそ四海といい天禄というので、おまえたちのためには、四海を一村と読み、天禄は作徳と読め。よくよくこれを肝に銘じなさい。

「四海困窮せば、天禄永く終わらん」とは難しい言葉です。この読み替えもいい加減で、報徳先生独自のものです。でも、良いとか悪いとか、正しいとか間違っているとかいった類いのものではありません。ここは、大学や高校や受験生の集まる予備校ではありません。毎日の勤労を促す、日々の生活の場です。実践を重んじます。「人を見て法を説く」です。この場合は、これが正解なのです。この場合、最も必要なことを農民に教えるのに、古典や賢人を利用したのです。嘘や欺瞞や悪用や詐欺なのではありません。承知の上の「変通」(へんつう:臨機応変の処置)であり、「権道」(げんどう:手段は正しくないが、目的は正しい道にかなうこと。目的をとげるために執る便宜の不正な手段・臨機応変の手段)なのです。アインシュタインが量子論のあいまいさに腹を立てて、「真理は一つだ」というのに「神はサイコロを振り給わず」といったように、ここでも、「聖人・君子は人糞については語らない」といって息巻いて非難する場ではありません。

諭吉翁の怨望の解決策 諭吉翁は、「怨望」を結論づけて、「ただ、人類天然の働きを塞(ふせ)ぎて、禍福の去来、皆、偶然に係るべき地位において甚だしく流行するのみ」としか言いません。従って、諭吉翁の「怨望」の解決策は、次のようです。

また人間の交際において、相手の人を見ずしてそのなしたる事を見るか、もしくはその人の言を遠方より伝え聞きて、少しく我意に叶(かな)わざるものあれば、必ず同情相憐れむの心をば生ぜずして、却ってこれを忌み嫌うの念を起し、これを悪(にく)んでその実に過ぐること多し。これまた人の天性と習慣とに由(よ)って然るものなり。物事の相談に伝言・文通にて整わざるものも、**直談にて円(まる)く治(おさ)まることあり**。また人の常の言に、実は斯くの訳なれども面と向かってはまさか左様にも、ということあり。即ちこれ人類の至情にて、**堪忍の心**の在るところなり。既に堪忍の心を生ずるときは、情実互いに相通じて **怨望・嫉妬の念**は忍(たちま)ち消散せざるを得ず。【『学問のすゝめ』121頁】

「古今に暗殺の例少なからずと雖(いへど)も、余常に言えることあり、もし好機会ありてその殺すものと殺さるる者として数日の間同処に置き互いに隠すところなくしてその実の心情を吐(は)かしむることあらば、如何なる讐敵にても必ず相和するのみならず、或いは無二の朋友たることもあるべしと。右の次第をもって考うれば、言路を塞(ふさ)ぎ業作を妨ぐるの事は、独り政府のみの病に非ず。全国人民の間に流行するものにて、学者と雖も或いはこれを免かれ難(かた)し。人生活潑の気力は、物に接せざれば生じ難し。自由に言わしめ、自由に働かしめ、富貴も貧賤もただ本人の自ら取るに任して、他よりこれを妨ぐべからざるなり。」【同】

「話せば、分かる」ですって？ 「堪忍の心」ですって？ 「給料を全額返納せよ」という報徳先生の気力に比べれば、諭吉翁のは、なんともまあ、気楽な解決策です。どうも、諭吉翁が「怨望」を論じたのは、ご自身本人が世間から中傷されていたからなのでしょう。そう、思わざるをえません。まず、『学問のすゝめ』が驚くべきほど売っていたので、大金と名声を手にした諭吉を「怨望」する者が多かったのは事実です。そんなとき、世間の「怨望爆発」を待っていたように、『学問のすゝめ』の「楠公権助論」(「第7編」)が導火線となって、「諭吉非難」や「諭吉怨望」が火を噴きました。

この世を挙げての激しい『学問のすゝめ』批判に対して、「好機、来たれり」とばかりに、諭吉翁は喜んで、明治七年、郵便報知新聞に檄文(げきぶん:敵の罪悪などをあげ、自分の信義・意見を述べて、公衆に呼びかける文章)『学問のすゝめの評』を慶應義塾五九樓仙萬(ごくろうせんばん:ご苦勞千万)の名前で発表しました。そこには、珍しく、諭吉翁の本心が遠慮なく吐露されています。

一を聞いて十を知る さて、このように、報徳先生と諭吉翁との考え方や意見や論調を並べて読んでみると、この顕学二人に、一つの共通点が見えてきます。それは、「一を聞いて十を知る」ことです。報徳先生は、一つの村の困窮から、其れを抜け出す絶対的な仕法を産み出しました。諭吉翁も、一つの事件から、絶対的な真理を考え出しました。このお二人は、絶えず、世の中を憂え、そして、この世の中を如何によくするかを絶えず考えていた「世の巨人」でした。二人は、決して絶望はしません。「窮すれば通ず」であり、「窮鼠、猫を嚙む」であり、「天は助す来る者を助く」であり、“We forge, he chains we wear in life.” Charles Dickens. (人生において我々が囚われている鎖は我々が生み出したものに他ならない) であり、“It will never rain roses: when we want to have more roses we must plant more trees.” George Eliot (バラが空から降ってくることはない。もっとバラが欲しければもっと多くの木を植えなさい) であり、“In the struggle between yourself and the world, second the world.” Franz Kafka (あなたと世の中との戦いなら世の中へのほうに賭けなさい) であり、“There is no use whatever trying to help people who do not help themselves. You cannot push anyone up a ladder unless he be willing to climb himself.” Andrew Carnegie (自らを助けない者を救おうとしても無駄である。梯子を上る意思のない者を他人が押し上げることはできない) であり、“One often contradicts an opinion when what is uncongenial is really the tone in which it was conveyed.” Friedrich Nietzsche (人が意見に反対するときはだいたいその伝え方が気に食わないときである) です。この際、分かり易い、実践的な教えが必要なのです。あとでまた思いつくことがあれば、そのときはまた、そのときの解釈でいいのです。そう、報徳先生も、諭吉翁も悟っていました。ここも、世間相手の、承知の上の、「変通」であり「権道」なのです。

またここに、例えば、報徳先生に次のような逸話があります。【『報徳記』216頁】

先生三縣令の属吏に命ぜられ野州眞岡の陣屋に至る

時に天保十四癸卯年(1843)七月、先生、奥州小名濱・野州眞岡・同州東郷・三縣令の属史に命ぜられ、野州眞岡陣屋に至り衆属吏と共に群居せり。

命を受ける日に意(おもへ)らく — 「縣令は郡村を治め民を安撫するの官なり。之が属(職)ならば、旧来辛苦する所の仕法を以て郡村に及ぼし萬民を安ずることを得ば、道の行はれんこと難からず」と。

怨望の働き ここで先生は — 「自分の仕法は、あらゆる苦しんでいる農民や農村に対して同じ効果を現すものだ。よく十分に調べてあるので、これこそ他の困窮するどの農村にも有効に働く方法である。いまさら、三県の実情を調べる必要はない。直ぐに、仕法を下すべきである」と主張しました。

でも、ここがお役人根性です — 「一応、現状を調べてみて、それにあった解決策をとるべきが常道である。規則に従え」と言って聞きません。新しいことをして、それに失敗すると自分の立場が危ないのです。いままで通りに行うのが安全で保身のためになる術策です。また、先生の仕法が成功してはなりません。お手柄は先生に行って、自分にはなんの得(とく)もないからです。「怨望」です。結局、先生の進言と仕法は採択されませんでした。

眞岡に至るに及て、[上司から]「仕法は新法にして古来の規則に符合せず。県令以下の決断を以て行ふことあたはず」として[断られ]空しく歳月を送れり。先生大に之を憂ふといへども如何ともすべからず。

ところが、途中で風向きが変わりました。日光の村がもう持たなくなった来たのです。先生に、「この危急を直ぐに救うための方策を調べて報告せよ」と命令が下ります。

然るに某月に至り、江都(こうと:江戸)に出べきの命あり。至れば則、命じて曰く — 「日光神廟(しんびょう)の祭田・多年荒蕪となり下民も亦甚だ窮せり。速に彼の地に至り見分し、之を再興し、諸民を安撫するの策を建白せよ」と。

統計学の祖

ここにおいて、先生は持論を弁じます。「一つのお手本があれば、他を律することができる」というのです。「わざわざ、日光へ行って農民の困窮状態をいちいち調べなくても、私の手元の資料で十分です」と進言しました。この考え方は、現代の「統計学」(statistics)に他なりません。幾つかの経験から得た具体的な知識から、他のものも類推できると考えたのです。既にして、経験豊かな報徳先生は、やっと、論吉翁が『学問のすゝめ』十三編「怨望の人間に害ある論ず」(119頁)で、「スタチステク」とカナで書いて紹介したほど、まだ、日本ではだれも考えが及ばなかった統計学的な理論を編み出していたのです。

先生命を受け直に言上して曰く — 「夫れ、天下の荒蕪地・大同小異なりといへども何ぞ再復の道に於て別あらん。且、人民の弊風に漂ひ、貧苦に陥るもの其の情實に至りては何れの国といへども異なることあるべからず。其の地に臨て見分せざれば知り難き者に非ず。今、斯に在て其の再復の策を献ぜば如何」。

先生の上司の役人には、この論理が理解出来なかったのです。先生が、「いまさら改めて、調べることは必要ありません。

官曰く — 「理は方(まさ)に然らんか。然りといへども其の地に臨て其の实事を述るものは常則なり。故に一たび見分を遂げて然る後言上せよ」と。

そこで、先生は、改めて、石頭の役人たちに理路整然と説明します。

先生曰く — 「敢て命に差(たが)ふにあらず。速やかに至らん而己。然れども臣の言、謂れなきにあらず。彼の地に至て再興の道を論ぜば、彼の地に就(つ)きて其の理を言はん。然る時は陳述する所、僅かに彼の地の事に止て、広く再復の道を該することあたはず。今、其の地を見ずして再復の道を全備せば天下の廢地挙げるべからざるの地なく、天下の民、窮苦を除くべからざるものなからん。然らば、一たび其の策を献じて其の理、斯に盡き再三の命を煩わはさず。亦可ならずや。前年、下総国大生郷村再復の道を奏す。其の理に至ては萬国といへども再興の道、此の他に不出。然れども一邑、見分を以て言上せり。故に一邑の事に止り、再び日光の邑々再盛の事を命じ玉ふ。後年、又他の廢地を挙げ貧民を恵み玉ふ時は、其の法則となるべからず。今、臣の意中を盡し、民間再盛・安撫の道を漏さずして奏し、若し不可ならば、仮令其の地に臨て後ち言上すると何の益かあらん。若し可にして用うべきの道ならば、**四海の地、皆悉く同じからん**。是を以て、**其の地を見ずして再興成就の道を奏せんことを請(こう)のみ**」と。

是に於て官、之を許可せり。

先生の意見が通りました。なかなか、見どころがある役人もいたものです。

先生門下を集会し、諭して曰く — 「夫れ日光の土地たるや神君鎮座の地にして村々は皆其の祭田なり。実に此の地を再復し此の民を安ずるの策を命じ玉ふこと、豈、仕法の幸いにあらずや。是れ故に我が積年丹誠するところの仕法、悉く筆記し之を奏せん。此の書一度全備する時は仮令道行はれずといふとも仕法の仕法たる所以は、**萬世に及て不朽すべからず**。孔子、一世道を行ふことあたはざるも、其の書、永世に朽ちずして、道、益々明かなり。二三子、夫れ之を勉(つとめ)よ」と。

なんとまあ、報徳先生は、大上段に振りかぶったことでしょう。自分の仕法の書と孔子の『論語』とを同列に並べて、高く評価しました。

是に於て、前々依頼の諸侯領邑の事を辞し、来客を止め、夜を以て日に継ぎ、僅々たる短文を筆するも尚、数日の思慮を盡し、数十度の添削を加へて然後可なりとす。実に千苦満苦の力を尽し、肺肝を砕きたること誠心限りなしと謂うべし。斯の如く研究の労を盡すこと三年にして尚末だ稿を脱せず。門下往往、事の[実行が]後れんことを恐れ、先生に告ぐると雖も研究の足らざるを憂て後れんことを憂へず。

時に眞岡の県令鈴木某、事に由て江都に至れり。

先生に告て曰く — 「早く書を奏すべし」と。

先生曰く — 「未だ全備すること能はず」。

是に於て県令官に聞(ぶん)す。

官、命じて曰く — 「全備せずと雖も可也。疾く出すべし」と。

先生已むを得ず、徹夜寝ずして心力を勞し、終に数十巻となして之を官府に奏せり。此の時に当たって初めて命じ玉ふ時の閤老以下、已に転勤あり。是故に又開業の命下らずして徒に歳月を消す。門人其の他に至るまで実業の行われざることを歎息せり。時に諸侯の邦内再興の指揮を廢すること既に三年、是を以て小田原領を始めとして往々中廢に至るもの

少からず。

後、仕法依頼の輩、日光再復の書に法(のつと)り以て、再興せんことを請ふ。

このように、長年、先生の仕法を待ち受けていた人たちがいました。先生の書類を見せて欲しいと言ってきました。先生は、断りました。

先生曰く — 「官に奏して未だ可否の命を得ず。私に之を[みなさんに]伝えること能はず」と。

是に於て此の[依頼の]旨を以て官に請ふ。

官、之を許可す。

是に由て、漸々(ぜんぜん:次第に)道を行ふことを得たり。

ああ、良かったですね。

【2025/05/05 都築正道】